THE ULiCS TIMES

2019年10月神戸大学附属図書館学生チームULiCS https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/

2019.10.vol.6

知的書評合戦ビブリオバトルを開催しました！

2019年６月24日月曜日、鶴甲第１キャンパス1階ラーニングコモンズにてビブリオバトルを開催した（ビブリオバトルの詳しいルールは２面参照）。神戸大学附属図書館学生チームULiCSとしては初の試みであり、神戸大学でビブリオバトルを開催すること自体、ラーニングコモンズ開設記念イベントとして2013年に３度開催されたきりであった。

ULiCS内では、「ビブリオバトルを開催したい」という声は数年前からあったものの、なかなか実行するまでには至っていなかった。その理由の一つとして、不定期ではあるが3、４か月に１度開催される「まごまご読書倶楽部」をすでに行っていたことがある。まごまご読書倶楽部とは、１つのテーマに沿った本をゆるく持ち寄ってゆるく話す、とにかくまごまごした集まりである。他の人と競い合い、１番を決める「バトル」よりも「まごまご読書倶楽部」のほうがULiCSの性に合っているという意見もあった。

しかし、ビブリオバトルには読書会と違った良さがあることに気が付き、部員数名の強い思いがULiCS主催ビブリオバトルを実施するに至らせた。開催にあたり、図書館職員と協力しながら、リハーサルや資料作成、広報を行った。

(上) 紹介された本。バトルの進行と共に展示していった(本の詳細は２・３面)。

(下)チャンプ本に選ばれた発表者への、賞品贈呈の様子。

ビブリオバトル当日は、５名のバトラーと10名を超える観戦者を迎えることができた。バトラーの中には、ビブリオバトルの経験者からビブリオバトルという言葉を初めて知った人までいたが、どの発表においてもバトラーの紹介する本への熱意と観戦者の興奮が伝わり、白熱したディスカッションが行われた。紹介された本は、いずれも興味深く、人文系から理数系など多岐に渡っていた。チャンプ本は非常に選び難かったことが推測されるが、一條次郎著『レプリカたちの夜』に決定した。チャンプ本に選ばれた発表者には、神戸大学図書館オリジナルトートバックと図書カード2,000円分が贈呈された。その他参加賞としてバトラーの５名にはうりこの付箋、クリアファイル、ピンバッチが贈られた。

外部に向けた大きなイベントを主催するのはほぼ初めてだったが、大盛況で主催者側であるはずのULiCSメンバーも観戦者として楽しんでいた。今後は、ビブリオバトルの定期開催や全国大学ビブリオバトルの地区予選を行うことなども検討中である。また、従来のまごまご読書倶楽部も継続して行っていきたいと考えている。今回のビブリオバトルを機会に大学内だけでも本を通して輪が広がり、ULiCSの活動に少しでも興味を持っていただけたのなら幸いである。

（文学部３年　畠田）

ビブリオバトルとは

ビブリオバトルとは、「人を通して本を知る、本を通して人を知る」をコンセプトに2007年に京都大学の研究室にて勉強会の一種として発案されたコミュニケーションゲームである。現在は、日本全国で様々な規模の大会が行われており、大きいものでは全国大学ビブリオバトルにおいて地区予選から全国大会まで開催されている。

ルールは至って簡単である。

1.発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる
2.順番に一人５分間で本を紹介する。
3.それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを行う。
4.すべての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

（ビブリオバトル公式ルール）

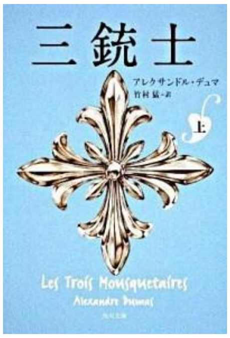
その他、発表原稿やレジュメ、パワーポイントなどのプレゼンテーションツールを使わない、発表者は自分以外の本に投票するなど、細かいルールは多少あるものの、形式などは自由である。今回のビブリオバトルは、全国大学ビブリオバトルレギュレーションに則って行った。

読書会にはないビブリオバトルの良さとしてよく言われるのが、「バトル」を意識することで、相手の興味を得ようとし、自分の発表を試行錯誤するので、それがコミュニケーションにつながるということである。つまり、自分本位で本を持ちより、好きなことを話すだけではチャンプ本にはなることができないので、自然と聞き手のことを考えることができるのである。また、聞き手もチャンプ本を選ぶつもりでバトラーの話を聞かなければならないので、真剣に聞くようになる。さらに、ビブリオバトルのいいところは、一番スピーチが上手い発表者を選ぶのではなく、あくまで読みたくなった「本」に賞が与えられるところである。読書会にももちろんいいところはあるが、コミュニケーションゲームとして考案されたビブリオバトルならではの良さがある。

（文学部３年　畠田）

ビブリオバトルで紹介された本

※部員がそれぞれにレポートしたので文体が異なります。



三銃士
Dumas, Alexandre(著)
竹村猛(訳)
角川書店　2009年
発表者：S.K.

ビブリオバトルでアレクサンドル･デュマ著の『三銃士』が紹介された。この本を読んだことがある人は多いのではないだろうか。この小説を元にした映画やドラマ、舞台もあり、とても人気な話である。この本の舞台はフランス。主人公のダルタニャンは銃士(＝マスケット銃で武装した歩兵)になるためにパリへとやってくる。その途中で三銃士であるアトス、アラミス、ポルトスと言い争いになり決闘をする羽目になる。しかし、そんな彼らのところへ三銃士の敵である枢機卿リシュリューの護衛士が現れる。ダルタニャンは三銃士と闘うのをやめ彼らに協力することを決める。この出来事をきっかけに四人は絆を深め合い、ともに様々な困難を乗り越えていく。この小説の一つの大きなテーマは友情である。“One for all, all for one”という言葉はまさに主人公四人の関係性を表しているようである。ダルタニャン、アトス、アラミス、ポルトスの四人はみんな性格がバラバラである。けんかっ早い者、落ち着きのある者、いつもふざけている者、謎めいた性格の者……。一見すると仲良くなるのは難しそうな四人だが、長い時間をともに過ごすことによって次第に友情が芽生えてくる。見た目だけで相手を判断せず歩み寄ろうとすることが大事である。様々な冒険を通して友情の大切さを教えてくれるこの『三銃士』、まだ読んだことがない人は是非読んでいただきたい。

（文学部２年　森口）

レプリカたちの夜
一條次郎
新潮文庫　2018年
発表者：T.N.

２番手の発表者T.N.さんが紹介してくれたのは、第２回新潮ミステリー大賞の受賞作。さらには、作家・伊坂幸太郎氏が帯に称賛の言葉を寄せている。「伊坂がええっていうんならええんやろな」T.N.さんのその言葉に会場に笑いがおきた。私は、好きな作家おススメの本ってつい買っちゃう、と共感しながら、そしてわくわくしながら聞き始めた。

あらすじは、動物レプリカ工場に勤める主人公が、夜にシロクマを目撃し、なぜ生きたシロクマがいるのか？という謎を明らかにするという本らしい。これだけでその独特な世界観が伺えるが、T.N.さんによると、この本の面白さはそれだけではない。「自我」がこの小説のテーマの一つなのだという。「自分のことって自分で説明できますか？」そう問いかけられると、この小説の中で何が真理として導かれるのか、気になってきた。他にも、ホラー小説にも似た表現技法、目撃されたはずのシロクマが上司であること、など気になる要素が多い作品だった。

この発表では、開始早々「５分間自分の好きな本のことを喋れるって最高の時間じゃないですか」と言い放っていたのが印象的だった。私にとっても、読書欲を掻き立てられ、ビブリオバトルの醍醐味を再確認できた５分間だった。発表者は、「常識が一つずつ崩されていく本。気持ちに余裕があるときに読んでほしい」と述べた。観戦者としても、『レプリカたちの夜』、皆さんにお薦めしたい。

（文学部３年　長田）

死にがいを求めて生きているの

朝井リョウ
中央公論新社
2019年
発表者：岸本

ビブリオバトルを開催したいと昨年度から考えていた。しかしいざバトラーとして参加が決まると不安に襲われた。

『死にがいを求めて生きているの』は複数の語り手の目線から、常に夢中になれることを探す雄介と一歩引いて見守る智也という２人を描写している小説だ。その語り手に２人の大学時代の同級生がいる。彼は中学時代にビブリオバトルで表彰されたことをひきずり、高校でも手当たり次第に周りの人に本を紹介する。その身勝手さゆえ彼は周囲から疎まれ、評価されるためにビブリオバトルを行っていると指摘されてしまう。そして彼は大学で出会った雄介に自分と同じ熱意の空回りや周囲とのズレを感じる。

ここで私の中にも雄介はいるのではないかと恐怖を感じた。目的と手段が逆転していないか、ビブリオバトルを評価されるための場として使っていないか、私を周囲はどう見ているのだろうか。私はその不安を発表で正直に伝えることにした。観戦者の方になぜこの本をおすすめしたいか伝えるには最も良い方法だと思ったからだ。朝井さんの小説は若者の心情や日本社会の状況を丁寧に描いており、話の展開に惹かれるものがある。しかしそのような魅力や細かなあらすじは調べていただくこととして、今回はこの１冊がなぜ私に影響を与えたのか、そしてこの本でビブリオバトルを行った理由を伝えた。この紹介文を読んで自分にもそのような部分があると不安を感じた方にはぜひ読んでいただきたい。

（文学部２年　岸本）

数学の贈り物

森田 真生
ミシマ社　2019年
発表者：K.U.

※この文章はK.U.さんが当日に発表された内容をもとに再構成したものです。

本書は、中学生でもわかるように難しいことを取り除き、数学の本質を表現した19篇のエッセイから成る。著者は、どの組織にも属さず、日本初の独立研究者と名乗っている。

数学が嫌いな方も多いとは思うが、それでも選んだ理由は「数学もそこまで悪いものではない」ということをそっと伝えたかったからだ。数学を嫌いになる数ある理由の中で「意味が分からなくなってきたから」というのがある。最初の簡単な計算は理解しやすくても、「－1×－1＝1」の意味がわからなくて挫折した人も多いだろう。そんな人たちへの答えの端緒として、「意味」というエッセイの中の、「数学は意味が分からなくなってからが本番だ」という言葉を示したい。つまり、「意味が分からなくなったならば、逆にどんな意味を当てはめれば上手く説明できるのか？」ということで、数学の発見の特徴の一つでもある。

意味が分からなくなってきてからが数学の本番で、そこからまた新しい意味が生まれて、更に突き進んでいくうちに、また意味が分からないことが出てきて、そこでまた新しい意味を当てはめて、の繰り返しが数学の発展の一側面だ。そんな感じで捉えると、数学は、無味乾燥とした意味の分からない計算ではなく、もっと人間味のある、人間だからこそできるもの、と思えるのではないだろうか。

（法学部２年　水田）

近代科学の源流

伊東俊太郎
中公文庫　2007年
発表者：原田

僕はバトラーとしてこの本を紹介した。選んだ理由は、大学でやるビブリオバトルなんだし学問が先人の遺産をもとに発達してきた歴史というのを本を通して話せたら、ちょうど場にあってるかなと思ったことだ。とはいえうまく説明できたかというと、実施後アンケート回答に「人文系の本がなかった」と書かれちゃうくらいにはひどく事故ってしまったのだが(ビブリオバトル普及委員会は原稿の用意を非推奨としているけど、やっぱ用意した方がいいよ)。

内容は、科学史年表なんかを見てもたいてい大きく空白がある約1000年間の通史だ。ギリシャ・ローマの哲学が初期キリスト教により受容され、国の乱れや異端追放によってビザンツ・アラビアと学問の中心が揺れ動き、12世紀の翻訳運動(12世紀ルネサンス)によりその成果が西欧へと受け継がれ、14世紀のガリレオの先駆者たちへとつながっていく。およそ文庫本に入れる密度じゃないと思うんだけど、予想外に読みやすい。まったくイメージの湧かない時代でもけっして歴史は断絶していたわけではなく、どこかでやはり繋がっているものなんだなと実感させられる。

ただ読み返して思うに、同著者の『十二世紀ルネサンス』の方が面白いところだけつまみ食いできて楽しいので、1冊目として紹介するとしたらこっちだったかな……。

（工学部1年　原田）

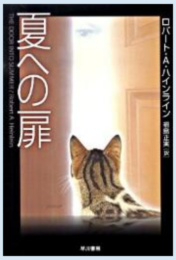
ULiCS新メンバーおススメの本

鮮やかな伏線回収、魅力的な登場人物、それから強盗と伊坂作品らしい三要素が詰まった作品。無茶苦茶でどこか憎めない男「陣内」の大学生時代と家裁調査官時代を中心に描かれる連作短編であり、読み終わった後ふっと笑みがこぼれるような一冊。　　（法学部１年 守安）

家裁調査官には、奇跡が起こせる。
『チルドレン』伊坂幸太郎/講談社文庫/2007年

僕の飼い猫のピートは、冬になると決まって夏への扉を探し始める……1970年、恋人に裏切られ、仕事もなくし、大好きな発明すらも騙し取られ、主人公ダンの心は真冬の空同様に凍てついていた。そんな彼の心を捉えたのは、30年の眠りを提供してくれる「冷凍睡眠保険」だった……。彼は、夏への扉を見つけることができるのか？　読むと明るい気分になれる、SF小説の傑作。

（法学部１年 都倉）



『夏への扉』ロバート・A・ハインライン/ハヤカワ文庫SF/2010年

トルコのイスタンブールへ亡命してきたネコのヤンは街で占いウサギと出会いともに働くことに。しかしある日突然占いウサギは姿を見せなくなり……？荷物をなくしたロバやおみくじを売るカラスなど、ちょっと滑稽で不思議な物語。読んだ後長い間忘れていて、ふと思い出して意味が分かったような、分からないような、そんなお話。（工学部２年 竹内）

全てはくり返されるようで
決してくり返すことはないんです。

『イスタンブールの占いウサギ』町田純/未知谷/1998年

高校卒業と同時に主人公・勇気が放り込まれたのは、三重県の山奥にある神去村。自然を相手に生きてきた人々と出会い、林業を通して主人公が成長していく様が見事に表現されている。ゆるくほっこりした物語、と見せかけて躍動感に溢れるシーンや思わず笑ってしまうような掛け合いも魅力的。何より変わり者だらけの登場人物たちが皆温かく、読んで元気になれる一冊である。続編「神去なあなあ夜話」も併せてぜひ。　（医学部１年 内田）

読書で、ほっと一息。
『神去なあなあ日常』三浦しをん/徳間書店/2009年

ULiCSでは新たに活動に参加してくれる方を募集しています。関心のある方はTwitterやメールアドレスからお気軽に連絡ください！ ▶Twitter: @ULiCS_KobeU_Lib　▶E-mail: libr-students@edu.kobe-u.ac.jp　▶部室: 自然科学系図書館２階

「図書館では消しカス入れ」の習慣をつけませんか？

図書館での自習を終え、帰ろうとしたそこのアナタ。勉強していた時に出たその消しカス、いつもどうしていますか？　机の上から払いのけたり、机の上に放置したりしてませんか？　手の平に集めても、近くにゴミ箱が見当たらない……なんてこともあると思います。

そこで、ULiCS発案の消しカス入れを使ってみて下さい！机上の消しカスをさっと袋に入れて、そのままゴミ箱へ捨てるだけ！かわいいポップが目印の設置場所は右の通り。

＜設置場所＞
・総合・国際文化学図書館：
　ラーニングコモンズのプリンター右、文具コーナー
・自然科学系図書館：
　１階文具コーナー、２階ミニコモンズ前、３階閲覧席
・社会科学系図書館：
　ラーニングコモンズ文具コーナー、小閲覧室前

未実装の館でもみなさんの
要請があれば実装されるかも…！？